

# 『懷風藻』に於ける吉野仙境観の成立

—— 神仙思想受容の一側面 ——

善養寺 淳 一

## 一、はじめに

神仙思想と日本文学との関係を考えるうえで上代文学の諸作品は、その始原として位置付けられるものである。現存最古の漢詩総集である『懷風藻』は、思想面からは律令国家の理念としての儒教に基づく帝徳称揚が見られるが、老荘思想や神仙思想も多くの詩に詠まれている。特に吉野地域が仙境と意識され、所謂吉野詩を成立させているが、『懷風藻』の注釈書に於いて、何故吉野が仙境と見做されるのか判然としない。<sup>1)</sup>この吉野を仙境と見做す条件とは何であったのか、本稿においてはその成立条件について考察をすすめていきたい。

## 二、神仙思想研究史の問題点

本考察に入る前に、神仙思想を研究する場合の研究史的な幾つかの問題点についてふれておきたい。

- 1 神仙思想とは中国の道教の構成要素の一つであること。従って神仙思想の研究は道教伝来と関係し、道教史の中にその展開を見ていかなければならない。
- 2 我が国の道教の研究史は大正期に始まったといわれ、その後も研究者の道教観が曖昧なために、道教とは何かという視点が研究者の間で明確にされず、昭和五十年代頃より、大正期を越す研究水準の進展となった。
- 3 神仙思想は道教の中核的要素であるが、道教（成立道教と民間道教に大別される）のうち、成立道教伝来には否定的であるが、民間道教は日本に確実に伝来していたとするのが下出積與博士の見解である。（和田萃氏の論考に「下出積與氏・上田正昭氏らの研究により、日本古代社会に民間道教が定着していたことがほぼ明らかになった。」とある。<sup>1)</sup>
- 4 この考察で取り上げる『懐風藻』への神仙思想の影響も、下出博士の見解に基づき考察をすすめていくものである。
- 5 民間道教の内容たる神仙思想及びこれに関係する仙薬・養生法は古代人の歓迎するところであったが、道教の呪術は律令政府の厳しい取締対象となったことが、度々『続日本紀』の太政官符に見える。<sup>2)</sup>

### 三、『懐風藻』の研究動向と見解

従来『懐風藻』は文学史的評価が低く、その価値は否定的とされていたが、<sup>3)</sup>その後の研究では再評価の動きがある。

#### 【資料1】

- (1) 『日本漢文学史概説』市川本太郎博士（東洋学術研究会）四一〜四二頁（昭和四十四年四月）

例えばこの集の序文について、『文選』序文との比較のうえで、「懐風藻の序文作者の文才が低いとするものではなく、却って、かかる文脈を学んでかくまで手際よく、簡明素朴に完成せしめた作者の文才はすぐれたものというべきである。」

(2) 『研究資料日本古典文学①』「懐風藻」津田潔氏一〇頁（明治書院）（昭和五十九年三月）

今日の研究では「類型的で思想的深みに欠けるという批判も、漢詩の担っていた役割や国家政策としての教育方針等の、日本の上代政治社会を念頭におくべきであり、無批判な中国詩を基準とした印象批評は、大きな意味を持つとは思えない。」

右の見解は再評価の動きと受け止められる。

#### 四、『懐風藻』と『文選』

『懐風藻』が『文選』と関係している点は知られている。

#### 【資料2】

(1) 『日本漢文学史概説』市川本太郎博士（東洋学術研究会）四六頁（昭和四十四年四月）

『懐風藻』と『文選』の関係について、「文選との関係は極めて深いものがあって、専ら文選を模範にしたものの如くである。」

(2) 『懐風藻全注釈』辰巳正明博士（笠間書院）一六頁（平成二十四年九月）

「懷風藻漢詩の漢語の出典は、多くの漢籍を用いていることが知られる。しかし、その多くは『文選』であることに注目される。それが直接的な出典か否かは検討されるべきであるが、『文選』および李善注からの出典が満遍なく見られることは、本注釈から確認されよう。」

ここで『文選』に見られる典型的な神仙像・神仙境がうかがえる詩として、卷二十一遊仙に収められる何敬宗の「遊仙詩」を挙げたい。遊仙詩は文字通り仙境に遊び俗塵を脱することを詠じた詩で、中国文学史上の詩の流れでは、魏・晋に盛んに作られているものである。<sup>⑧</sup>この詩に詠われる神仙世界はあくまでも憧憬の対象である。その世界は時の移ろいとは無縁の永遠が支配する場所である。作者は心身を遠い白雲に寄せ、王子喬を慕い、仙人との交友を夢見る。峨々たる山脈を鶴に乗じて飛行し、俗世を超越し、心をはるか遠くに解き放つのである。この詩の詩句は検討の結果ほぼ全詩句が神仙思想の用語である。

【資料3】

新釈漢文大系14 『文選（詩篇上）』（明治書院）一四四頁

遊仙詩 何敬宗

青青陵上松 亭亭高山柏  
光色冬夏茂 根柢無凋落  
吉士懷貞心 悟物思遠託  
揚志玄雲際 流目矚巖石

羨昔王子喬 友道發伊洛  
迢遞陵峻岳 連翩御飛鶴  
抗跡遺萬里 豈戀生民樂  
長懷慕仙類 眇然心縣邈

では、『懷風藻』の作者たちはこの自然に憧憬が重ね合わされた詩の世界を、どのように受け止め、それを作品化しているか、また吉野詩に詠われている神仙思想や仙境観について見てゆくことにする。

## 五、吉野詩作者の時代区分

『懷風藻』の時代区分は通説的な時代区分<sup>9)</sup>(小島憲之博士『上代日本文学与中国文学』下、塙書房、昭40を基本に、編者の私案を示したもの)に従えば次のとおりである。

- 第一期Ⅱ近江朝(六六七〜六七二)
- 第二期Ⅱ天武朝〜平城遷都の年和銅三年(六七二〜七二〇)
- 第三期Ⅱ奈良遷都〜天平九年(七一〇〜七三七)
- 第四期Ⅱ天平九年〜天平勝宝(七三七〜七五一)

この四区分に吉野詩の詩人十二名(一)内詩番号)、を分けると、

第一期 なし

第二期 葛野王(11) 藤原史(31・32)

第三期 中臣人足(45・46)・大伴王(47・48)・紀男人(72・73)・吉田宜(80)・大津首(83)・

藤原宇合(92)・藤原万里(98)・丹墀広成(99・100)・高向諸足(102)

第四期 葛井広成(119)

となる。

この分類から第二期以降が吉野詩の作者の出現となる。この第二期は、後述のように壬申の乱後の天武天皇の御世であり、皇親政治による本格的な律令国家樹立へと向かった時代である。また同時に天皇の宗教的権威が高められ宗教的統制も強化された時代である。<sup>10)</sup>『懐風藻』第二期の特色としては、詩題の多様化、六朝詩・初唐詩の影響、遊覧詩による自然への接近や儒教・老荘思想、山水詩の影響が現れてくる時代である。このような時代背景の中で、吉野詩の作者たちは、外来の神仙思想の知識に接し、これを吸収し、さらには作品の中に神仙的知識を詠み込んでいったのである。後述の六、(3)に於いて分析した吉野詩の詩句について、文学作品の典故或いは諸思想のうち、神仙思想の知識は考察対象の全十七詩に見られ、吉野地域が神仙境と見做される条件のひとつを確認することができた。(詩句分析結果一覧表は本稿末尾に掲載)また、詩句によっては儒教思想に神仙思想が重なる重層的詩作も散見されるが、これは詩人個人のうちに、宮廷社会と仙境憧憬が併存するこの詩集の性格を反映したものと考えられる。

## 六、吉野詩分析の観点と考察

具体的には吉野詩十七篇の詩句につき、その用い方を左記の①・②・③に分類して考察した。各分類基準は次のとおりである。(末尾表中のⅠⅡⅢⅣ、①・②・③が対応)

(1) 風土的な詩句、とは、吉野詩の詩句に見られる吉野の地の気候、地形、地勢、など自然環境を意味する語や形容する語である。

更に、この①を次のように分類し考察することにする。

Ⅰ 吉野の地形・山川・清浄さ・閑寂さについて用いられた詩句

Ⅱ 吉野の気候・季節の情景・推移・景物等に用いられた詩句

Ⅲ 吉野の特定地域、地名について用いられた詩句

Ⅳ 吉野遊覧・吉野宮従駕等について用いられた詩句

吉野の風土的な特色として、

① 吉野は「よい野」という普遍的名称を持ち、吉野川流域の広地をさすものである。<sup>②</sup>【補注1】

② 吉野地域、特に大台ヶ原山は我が国屈指の多雨地帯で、この多雨が湿潤な気象条件を生み我が国を代表する原生林を形成してきた。<sup>③</sup>【補注1】

③ 更に吉野に多く発生する霧は、古代人にとって生命の表現と言われる。<sup>④</sup>

(2) 歴史的な詩句、とは、吉野詩の詩句に見られる吉野の地の時間経過に伴う事象の移り変わりであり、政治的事項も含まれる。吉野の歴史的条件としては、吉野詩に詠われる遊覧・従駕詩は単に吉野を詠うだけでなく壬申

の乱の「革命の聖地」としての歴史の意味を持つ。吉野への遊覧行為は儒教的な徳を受け養生の地であるとともに、天皇はここでは神仙に変化し不老長生を願う地でもある。更に古来からの神仙的な伝承や説話のある神仙的異境としての歴史の意味を認識したうえで詩作されている。

前述の『懐風藻』の通説的な時代区分では、吉野詩の出現は第二期以降であった。第二期は天武朝からの時期区分であるが、『日本書紀』巻二十八は天武天皇（大海人皇子）の出家、吉野入りから記述が開始されている。<sup>15</sup>

ここに古代最大の戦乱と言われる壬申の乱が始まる。天武天皇は吉野に入り、以後吉野方は勝利する。近江朝を倒した天武天皇の強力な権力樹立の出発点となったのが吉野の地であり、この意味で吉野は「革命の聖地」として見られるようになったといえる。天武帝は八年（六七九）六人の皇子・皇后とともに吉野宮に行幸され「吉野の盟約」を行わせるが、これも吉野の地が歴史的に重要な舞台となっている。

ここで『懐風藻』吉野詩について本稿末尾の詩句分析結果一覧表(2)中段「歴史的な詩句」を中心に考察を加えていくことにする。

11 遊龍門山……吉野龍門山遊覧の作。「龍門」は中国の「登竜門」や『遊仙窟』冒頭「河を積石に導きて龍門に至る」と。の故事をふまえるという。この地名には吉野の異境としての歴史が凝縮されている点がかがえる。

31 遊吉野・32 遊吉野・吉寶……『懐風藻』では吉野に遊覧する行為は、儒教的な徳を受け、自然の中での養生である。天皇の御幸に従う者も日頃の宮廷での勤めとは違った環境の中で詩作をしたと思われる。一方天皇は古来宗教的な聖地として特別視されてきた吉野の地で不老不死を願うのである。

32 「吉寶」……「吉寶」はこの詩では天皇であるといわれ、それを『莊子』逍遙遊での堯帝の汾水の遊び、或いは『漢武故事』の黄河汾水になぞらえている。



- 45 遊吉野宮……吉野の離宮への遊覧は、前述11のように異境の歴史をふまえ詠われる。
- 46 遊吉野宮・狎鳳閣・啓龍樓……「遊吉野宮」には離宮遊覧と天皇行幸を示し、「鳳閣」「龍樓」ともに天皇の比喩とされる。ここには天皇に従った詩人たちの天徳称揚の姿勢がうかがえる。
- 47 從駕吉野宮・指南北・正西東……吉野宮への行幸に付き従う場面が詠まれる。「朝雲は南<sup>北</sup>を指し」・「夕霧は西<sup>東</sup>を正す」とは、天皇のお治めになる方角や区域を表す。
- つまり天皇中心の王土を歌い、神とされる天皇を褒め称えている。
- 48 從駕吉野宮・神仙……この詩の神仙は天皇を喩えている、47の詩に続き天皇を称えている。
- 72 遊吉野川……多く詠われる吉野川は、吉野仙境観の成立条件の一つ、風土的条件である。
- 73 扈從吉野宮・鳳蓋停南岳……この詩も47と同じく吉野宮への行幸の際に詠まれ、「鳳蓋停南岳」は「天子南面」の思想であるという。
- 80 從駕吉野宮・神居深亦靜……この詩も吉野宮への從駕の詩。「神居」と天皇を神仙に見做している。
- 83 藤原大政遊吉野川……31・32の藤原史「遊吉野」に和す作。80同様に天皇を神仙と見做して、この吉野の地の仙境としての歴史と天皇の徳とを詠う。
- 92 遊吉野川……「吉野川」の仙境に遊覧した時の作。この詩の冒頭「芝蕙蘭蓀」は、靈芝・香草・瑞草でありどれも仙界の植物である。吉野は古来より丹生（丹は辰砂であり、『抱朴子』では不老不死の仙薬）で知られており、吉野山の土壌から採取された試料から水銀含有が確認されている。このような仙境観をふまえての歴史認識が窺える詩である。
- 98 遊吉野川……詩句に「友」「賓」、とあり友人との遊覧の詩。仙境の伝説も詠われる。
- 99 遊吉野山……吉野山遊覧の詩。98と同じく仙境吉野の伝説をふまえた詩である。
- 100 吉野之作……この詩も吉野の仙女に巡りあつた伝説をふまえて吉野の勝地を詠う。

102—從駕吉野宮・方今留鳳公・駐蹕望仙宮……これも吉野宮への從駕の詩。昔の美稻の魚採りに対し、現在は天皇が行幸され、鳳を留める天皇が仙宮を望む宮に行幸されている意。この様子を中国の故事や日本の伝説をふまえて詠んでいるのである。

119—藤太政佳野之作・獵智……「獵智」は、雄略天皇の逸話をふまえていればこの地の歴史である。

このように、天皇を神仙と見立て、仙境と見做す吉野に行幸して作詩していることから、吉野の地の歴史的な重要性が窺えるのである。

この吉野の地が神仙境と見做されるのは何時頃からであろうか。前述の『懷風藻』の時代区分に吉野詩作者の時代を配当した考察から第二期の葛野王・藤原史が早い時期の作者といえる。この二名の生没年につき『日本古代人名辭典』（吉川弘文館昭52）等で確認すると次のとおりである。

葛野王（六六九〜七〇五年） 藤原史（六五九〜七二〇年）

二名ともにほぼ同時代であるが、葛野王の詩11「遊龍門山」について、その詩句「龍門山」は、前掲『懷風藻全注釈』では「吉野にある山。所在不明。」とするが、宮坂敏和氏は『吉野その歴史と伝承』九頁に「竜門岳」を挙げ、この詩と「竜門仙」の伝承を解説している。葛野王は天智天皇の孫で、その生涯は不遇であったが、「王が吉野の山河に遊んだころ、すでにこの地方を中国の神仙の住地になぞらえていたこと、すなわち竜門岳が、白鳳のころに周の王子喬が白鶴に乗って蓬萊山へ飛んだという故事を内包し、蓬萊山的仙境の対象にされていたことに着目する必要がある（堀池春峰「竜門寺についての一考察」『御嶽信仰』雄山閣昭60三二頁）」とのべておられる。また、別の研究者、前園実知雄・松田真一両氏も葛野王の『五言・遊龍門山。一首』から王の没年頃（慶雲二年・七〇五）までに「竜門山」を神仙境とする観念があったことがわかる、とのべておられる。<sup>18)</sup>

天皇の吉野行幸は、天武天皇の後、その後持統天皇においても行われ、その回数是在位十四年中三十一回に及んだ

という。更には文武・元正・聖武天皇も行幸されている。<sup>19</sup> 壬申の乱という大きな政治的動乱を経て後にこそ、以前にも増して吉野が長期に亘り特別な土地と見られていたことが理解できる。

(3) 文学(典故)・思想(神仙思想)的な詩句。

『懷風藻』詩句は必ずしも一つの思想の詩句とは限らないので、吉野詩詩句の分析により考察した。

A Ⅱ 儒教思想      B Ⅱ 老荘思想      C Ⅱ 神仙思想

D Ⅱ 仏教思想      E Ⅱ その他の思想

これらの詩句に看取できる思想の分類については先行研究による。<sup>20</sup>

(詩句分析結果一覧表は末尾に掲載)

さらに吉野の宗教的聖地としての条件がある。古来この地が日本有数の聖地であることはよく知られている。<sup>21</sup> また、ここには丹生川上神社(『延喜式』)が鎮座し、『続日本紀』に黒毛の馬を加えて祈雨<sup>22</sup>、との記録があり、此処が水源信仰の対象であったことがわかる。吉野の深山幽谷では修行に励む宗教者の存在があり、歴史的に聖地として意識されるようになっていった点が挙げられる。

この吉野の地が宗教的聖地として知られている点については、山岳宗教、修験道の開祖とされる役行者小角(生没年未詳とされるが、『続日本紀』文武天皇三年(六九九)に伊豆配流の記事が見えること<sup>23</sup>から、この頃の人物であろう。)を挙げることができる。

役小角は幾つかの寺の開創となっているが、吉野は小角のように国家公認ではない宗教者の存在がうかがえる地域である。<sup>24</sup> 『今昔物語集』巻第十一、本朝付仏法の第廿四、久米仙人の話<sup>25</sup>でも、久米仙人は竜門寺に住み修行したという伝承である。吉野地域の特殊性のひとつは、山岳重畳たる山脈に阻まれた未開の地であり、此処を舞台に深山幽谷

に身を潜め、修行に励む宗教者が居たということである。しかもこの地は都からは余りにも遠い地ではなく、逆に、前述の天皇の行幸に見られるように、距離的に都（中央）に大きな影響を与える適当な条件の地でもあったといえる。清浄な自然と神霊の宿る吉野の地は、聖性を帯びた特別な地として意識されるようになっていく。『懐風藻』吉野詩においても単に自然の清らかさだけでなく、こうした宗教的雰囲気詩人の意識にあり、また詩情の背景にもあることから、此処を仙境と見做したのではないかと推測される。

## 七、まとめ

以上の考察の結果をまとめてみると次のとおりである。

- (一) 『懐風藻』吉野詩において吉野の地が仙境と見做される前提は、我が国への神仙思想の伝来であった。その伝播形態は民間道教であった。
- (二) 神仙的な知識の集積が当時舶載せられた神仙思想の漢籍であったと考えられる。その代表的なものが『文選』、遊仙詩であった。これらの文献所載の神仙的知識、神仙像は古代人の想像を刺激し神仙世界への憧憬を一層増幅させるものとなったと考えられる。
- (三) 神仙思想の伝来、神仙思想関連の漢籍による世界観念の発見は『懐風藻』という異国の文字、新文学形式で創出する作品の好適な詩題となり、待宴従駕や遊覧の際の作詩の材料とされたのである。
- (四) 吉野詩は『懐風藻』総数の約15%にあたるが、吉野を仙境と見做し、作詩する条件としては次の四つの条件が考えられる。

- ① 第一は神仙思想の知識を持っていたということである。
- ② 第二は吉野の風土的条件である。その特有の地形、気象条件が、古代人にとつては、外つ国の岬々たる山稜に雲霧のわく遙かなる神仙世界を眼前に彷彿とさせる風景であつたと推測できる。
- ③ 第三は、吉野の歴史的条件である。吉野が天皇御自身にとつても、扈從の詩人にとつても特別な意味を持った歴史的な地であり、この神聖な場所の特別な力を得て天皇も神仙に変化するのである。
- ④ 第四は、宗教的聖地としての条件である。前記、②の風土的条件は吉野の宗教的雰囲気醸成する。この聖なる実景は、古代人の心のうちなる神仙思想という聖なる心象との結合を促したと考えられる。

右の四条件の結びついたところに、吉野仙境観というものが成立したのではないか、と考えるものである。今後も文学作品への神仙思想受容につき検討を加え、日本文学のひとつの土壌としての思想という観点から考察を深めたい。

## 註

- (1) 『懷風藻』江口孝夫（講談社学術文庫1452）平成十二年三八三〜三八八頁。
- (2) 『古代神仙思想の研究』下出積與（吉川弘文館）昭和六十一年、一頁。
- (3) 註(2)に同じ。二〜八頁。
- (4) 『薬獵と『本草集注』——日本古代の民間道教の実態——』和田萃『選集 道教と日本』第二卷所収（雄山閣 平成九年）五頁「日本古代に民間道教が伝来して、信仰や文化面に多大の影響を与えていたことは、下出説によつてほぼ決定的になり、従来の諸説はここに止揚されたといつてよい。」
- (5) 註(2)に同じ。五頁。
- (6) 『完訳注釈続日本紀』第一分冊 林陸朗（現代思潮社）平成元年一五四〜一五五頁。卷第八元正天皇養老二年◎

冬十月庚午条を参照

- (7) 『文学に現はれたる我が国民思想の研究(一)』津田左右吉(岩波文庫)大正五年(覆刻東京洛陽堂)七二頁。
- (8) 『中国自然詩の系譜』田部井文雄(大修館書店)平成七年一一七～一一八頁。
- (9) 『上代文学研究事典』小野寛・櫻井満(おうふう)平成八年一五四～一五五頁。
- (10) 『歴代天皇総覧』笠原英彦(中公新書)平成十三年一〇三～一〇七頁。
- (11) 『懐風藻全注釈』辰巳正明(笠間書院)平成二十四年
- (12) 『古代地名大辞典本編』(財)角川文化振興財団編(角川書店)平成十一年一五二頁。
- (13) 『大峰山・大台ヶ原山自然のおいたちと人々のいとなみ』大和大峯研究グループ(築地書館)平成二十一年八一～八四頁。
- (14) 『日本文学と気象』高橋和夫(中公新書)昭和五十三年一八～四四頁
- (15) 『日本書記③』新編日本古典文学全集小島憲之他(小学館)平成十年三〇一頁。
- (16) 『日本古代史事典』江上波夫他(大和書房)平成五年二三一・二四〇頁。
- (17) 『日本の聖地』久保田展弘(講談社学術文庫)平成十六年二八五頁。
- (18) 『吉野仙境の歴史』前園実知雄・松田真一(文英堂)平成十六年一五五頁。
- (19) 『吉野その歴史と伝承』宮坂敏和(名著出版)平成二年一一四～一一七頁。
- (20) 註(11)に同じ。
- (21) 註(17)に同じ。
- (22) 『新訂増補國史大系延喜式前篇』吉川弘文館昭和五十八年一九一頁。
- (23) 『完訳注釈続日本紀』第四分冊林陸朗(現代思潮社)平成元年四二二頁。卷第廿四淳仁天皇天平宝字七年◎五月戊申(中略)○庚午条を参照。

(24) 『日本歴史大事典 1』朝尾直弘他（小学館）平成十二年四〇七頁。

(25) 『完訳注釈続日本紀』第一分冊林陸朗（現代思潮社）平成元年九頁。卷第一文武天皇即位三年◎五月辛酉（前略）  
○丁丑条を参照

(26) 註(19)に同じ。一四三～一四六頁。

(27) 『今昔物語集 三』新日本古典文学大系三五池上洵一（岩波書店）平成五年六八頁。

**補注 1** 本稿に於ける地名の指す範囲について（囲み線は筆者加筆）

資料① 『角川日本地名大辞典29奈良県』（角川書店）一九九〇年 二二頁に、奈良県（旧大和国）の自然と風土に

ついて「奈良県は地形的に奈良盆地を中心とする北部と南部の吉野山地」と二分することができ、両者が古代以来独特の歴史の舞台となってきた。」とある。

資料② 『角川日本地名大辞典29奈良県』（角川書店）一九九〇年 二二三頁に、奈良県「大台ヶ原山」（上北山村）は

「吉野郡上北山村」と三重県宮川村との境に位置する大峰山脈の東側に南北に連なる台高山脈の主峰をなす。また吉野川、北上川、宮川の水源地をなす。（中略）年間雨量5,000mmを越すわが国有数の多雨地帯であり、山中には原始林的な樹林が繁茂。」とある。

資料③ 『角川日本地名大辞典29奈良県』（角川書店）一九九〇年 一一五三頁に、吉野という地名につき、「吉野

という地名は普遍的なもので「よい野」すなわち吉野川流域の広地を指したものである。（県史14・吉野町史）吉野は多義で最も広くは奈良県南部の吉野郡のことであり、以下吉野川筋の町村域、現吉野町域、

吉野川南岸の旧吉野町域となり、**最も狭くは吉野山を指す。**

右資料③のように、吉野の地名の範囲には広狭があるが、本稿では「最も広い南部の吉野郡」を指すものである。その理由は、前掲資料①の自然と風土の観点から区分された吉野山地を対象として考察をすすめているためである。この最も広い地名区分としての吉野郡は、大台ヶ原山を含む行政区域の上北山村を含んでいる地域である。(前掲『角川日本地名大事典』一四二〇頁。) ここで資料①「吉野山地」と、資料②「大台ヶ原山」を含む「吉野郡」、及び資料③「吉野山」との関係については、

資料④ 『日本地名大辞典』第6巻 澤田久雄編(日本書房) 昭和十三年 五七〇五頁に、「こゝに吉野と稱するは必ずしも吉野山・吉野町に限定せず、**總じて吉野山を中心とする吉野群山(吉野山地)即ち大和國吉野郡一帯の汎稱とす。**」

とあることから、本稿の考察対象地域として「吉野山を中心とする吉野山地」と「大台ヶ原山」(↓上北山村に含まれ「吉野郡」に属する。)とを一括して考察するも差支えなきものと考えられるのである。



【参考資料】詩句は表記上やむを得ず旧字体を新字体に改めた箇所がある。日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（岩波書店）による。

番号	『懷風藻』の詩題及び詩句・作者	(1) 風土的な詩句	(2) 歴史的な詩句	(3) 文学(典故)・思想(神仙思想ほか)的な詩句
11	五言。遊龍門山。一首 葛野王 命駕遊山水。長忘冠冕情。 安得王喬道。控鶴入蓬瀛。	Ⅲ龍門山 <sup>1</sup>	遊龍門山	A C 龍門山 命駕・A C 遊山水・冠冕情 安得・C 王喬道・C 控鶴・C 入蓬瀛
31	五言。遊吉野。二首。(一) 藤原史 飛文山水地。命爵薛羅中。 漆姬控鶴舉。柘媛接魚通。 煙光巖上翠。日影瀆前紅。 翻知玄圃近。對翫入松風。	IV 遊吉野 <sup>1</sup> Ⅰ山水 <sup>2</sup> ・Ⅱ薛羅 <sup>2</sup> Ⅱ煙光 <sup>3</sup> ・Ⅰ巖上翠 <sup>2</sup> Ⅱ日影 <sup>2</sup> ・Ⅱ瀆前紅 <sup>2</sup>	遊吉野	A C 遊吉野 飛文・A 山水・爵・C 薛羅 C 漆姬・C 控鶴舉・C 柘媛・C 接魚通 C 煙光巖上翠・C 日影瀆前紅 C 玄圃近・C 對翫松風
32	五言。遊吉野。二首。(二) 藤原史 夏身夏古色。秋津秋氣新。 昔者聞汾后。今之見吉賓。 靈仙駕鶴去。星客乘查遼。 諸性汲流水。素心開靜仁。	IV 遊吉野 <sup>1</sup> Ⅲ夏身 <sup>1</sup> ・Ⅲ秋津 <sup>1</sup> ・ Ⅱ秋氣 <sup>2</sup>	遊吉野 吉賓	A C 遊吉野 夏色 昔者・B C 汾后・吉賓 C 靈仙・C 駕鶴・C 星客・乘查遼 A 諸性汲流水・A 素心開靜仁
45	五言。遊吉野宮。二首(一) 中臣人足 惟山且惟水。能智亦能仁。 萬代無埃所。一朝逢柘民。 風波轉入曲。魚鳥共成倫。 此地卽方丈。誰說桃源賓。	IV 遊吉野宮 <sup>1</sup> Ⅰ惟山 <sup>2</sup> ・Ⅰ惟水 <sup>2</sup> ・ Ⅰ能智 <sup>2</sup> ・Ⅰ能仁 <sup>2</sup> ・ Ⅰ無埃所 <sup>2</sup> Ⅱ風波 <sup>2</sup> ・Ⅱ魚鳥 <sup>2</sup> Ⅰ此地 <sup>1</sup>	遊吉野宮	A C 遊吉野宮 A 惟山・A 惟水・A 能智・A 能仁 C 逢柘民 B 魚鳥共成倫 C 方丈・C 桃源
46	五言。遊吉野宮。二首(二) 中臣人足 仁山狎鳳閣。智水啓龍樓。 花鳥堪沈翫。何人不淹留。	IV 遊吉野宮 <sup>1</sup> Ⅰ仁山 <sup>2</sup> ・Ⅰ智水 <sup>2</sup>	遊吉野宮 狎鳳閣・啓龍樓	A C 遊吉野宮 A 仁山・A 智水・狎鳳閣・啓龍樓 花鳥・沈翫・何人・不淹留

『懷風藻』に於ける吉野仙境観の成立

<p>47</p> <p>五言。從駕吉野宮。應詔。二首。          (一) 大伴王          欲尋張騫跡。幸逐河源風。          朝雲指南北。夕霧正西東。          嶺峻絲響急。谿曠竹鳴融。          將歌造化趣。握素愧不工。</p>	<p>IV 吉野宮(宮滝辺りの離宮) ①</p> <p>一 河源風 ②          二 朝雲 ③ · 二 夕霧 ③          一 嶺峻 ② · 一 谿曠 ②</p>	<p>從駕吉野宮</p> <p>指南北・正西東</p>	<p>AC 從駕吉野宮(宮滝辺りの離宮)</p> <p>C 欲尋張騫跡・C 幸逐河源風          E 朝雲指南北・E 夕霧正西東          將歌・B 造化趣・握素・愧不工</p>
<p>48</p> <p>五言。從駕吉野宮。應詔。二首。          (二) 大伴王          山幽仁趣遠。川淨智懷深。          欲訪神仙迹。追從吉野潯。</p>	<p>一 山幽仁趣遠 ② ·          一 川淨智懷深 ②          一 吉野潯 ②</p>	<p>從駕吉野宮</p> <p>神仙</p>	<p>AC 從駕吉野宮(宮滝辺りの離宮)</p> <p>AC 山幽・AC 仁趣遠・AC 川淨・AC 智懷深          C 欲訪神仙迹・AC 吉野潯</p>
<p>72</p> <p>七言。遊吉野川。一首。紀男人          萬丈宗巖削成秀。千尋素瀉逆折流。          欲訪鍾池越潭跡。留連美稻逢槎洲。</p>	<p>一 吉野川 ①          一 萬丈 ② · 一 宗巖 ② · 一 削成秀 ② ·          一 千尋素瀉 ② · 一 逆折流 ②          一 槎洲 ①</p>	<p>遊吉野川</p>	<p>AC 遊吉野川</p> <p>C 萬丈宗巖削成秀・C 千尋素瀉逆折流          C 欲訪鍾池越潭跡・C 留連美稻逢槎洲</p>
<p>73</p> <p>五言。扈從吉野宮。一首。紀男人          鳳蓋停南岳。追尋智與仁。          嘯谷將孫語。攀藤共許親。          峰巖夏景變。泉石秋光新。          此地仙靈宅。何須姑射倫。</p>	<p>IV 吉野宮(宮滝辺りの離宮) ①</p> <p>一 南岳 ①          二 攀藤 ②          一 峰巖 ② · 二 夏景變 ②          一 泉石 ② · 二 秋光新 ②          一 此地 ①</p>	<p>扈從吉野宮</p> <p>鳳蓋停南岳</p>	<p>AC 扈從吉野宮・          AC 鳳蓋停南岳・AC 追尋智與仁          BC 嘯谷將孫語・攀藤・共許親          A 峰巖夏景變・A 泉石秋光新          C 此地仙靈宅・BC 何須姑射倫</p>
<p>80</p> <p>五言。從駕吉野宮。一首。吉田宜          神居深亦靜。勝地寂復幽。          雲卷三舟谷。霞開八石洲。          葉黃初送夏。桂白早迎秋。          今日夢洲上。遺響千年流。</p>	<p>IV 吉野宮(宮滝辺りの離宮) ①</p> <p>一 勝地寂復幽 ①          二 雲卷 ③ · 三 八石洲 ①          二 霞開 ③ · 一 八石洲 ①          二 葉黃 ② · 二 初送夏 ②          二 桂白 ② · 二 早迎秋 ②          三 夢洲上 ①</p>	<p>從駕吉野宮</p> <p>神居深亦靜</p>	<p>AC 從駕吉野宮</p> <p>C 神居深亦靜・C 勝地寂復幽          C 雲卷三舟谷・C 霞開八石洲          C 葉黃・初送夏・桂白・早迎秋          今日夢洲上・遺響千年流</p>

<p>83</p> <p>五言。和藤原大政遊吉野川之作。一首 大津首 地是幽居宅。山惟帝者仁。 潺湲侵石浪。雜沓應琴鱗。 虛懷對林野。陶性在風煙。 欲知歡宴曲。滿酌自忘塵。</p>	<p>92</p> <p>五言。遊吉野川。一首。藤原宇合 芝蕙蘭蓀澤。松柏桂椿岑。 野客初披薛。朝隱暫投簪。 忘筌陸機海。飛繳張衝林。 清風入阮嘯。流水酌嵇琴。 天高槎路遠。河迴桃源深。 山中明月夜。自得幽居心。</p>	<p>98</p> <p>五言。遊吉野川。藤原万里 友非干祿友。寔是滄霞賓。 縱歌臨水智。長嘯樂山仁。 梁前柘吟古。峽上簧聲新。 琴樽猶未極。明月照河濱。</p>	<p>99</p> <p>五言。遊吉野山。一首。丹墀広成 山水隨臨賞。巖谿逐望新。 朝看度峰翼。夕翫躍潭鱗。 放曠多幽趣。超然少俗塵。 栖心佳野域。尋問美稻津。</p>
<p>―地是幽居宅①・―山惟帝者仁② ―潺湲②・―侵石浪② ―雜沓應琴鱗② ―林野②・―風煙②</p>	<p>IV遊吉野川① ―芝蕙蘭蓀澤②・―松柏桂椿岑② II薛② ―清風②・―流水② ―河迴② ―山中①・―明月夜②</p>	<p>IV遊吉野川① ―水智②・―山仁② ―明月照河濱②</p>	<p>IV遊吉野山① ―山水②・―巖谿② II朝看度峰翼②・II夕翫躍潭鱗② ―放曠②・―多幽趣② III佳野域①</p>
<p>藤原大政遊吉野川</p>	<p>遊吉野川</p>	<p>遊吉野川</p>	<p>遊吉野山</p>
<p>AC遊吉野川 AC地是幽居宅・A山惟帝者仁 潺湲・侵石浪・雜沓・應琴鱗 林野・A陶性在風煙 欲知・歡宴曲・滿酌・自忘塵</p>	<p>AC遊吉野川 C芝蕙蘭蓀澤・C松柏桂椿岑 B野客初披薛・B朝隱暫投簪 B忘筌陸機海・飛繳張衝林 B清風入阮嘯・B流水酌嵇琴 C天高槎路遠・C河迴桃源深 明月夜・自得・C幽居心</p>	<p>AC遊吉野川 干祿・滄霞 ABC縱歌臨水智・ABC長嘯樂山仁 C梁前柘吟古・C峽上簧聲新 未極・明月</p>	<p>AC遊吉野山 ABC山水隨臨賞・ABC巖谿逐望新 ABC朝看度峰翼・ABC夕翫躍潭鱗 AB放曠多幽趣・AB超然少俗塵 AB栖心佳野域・B尋問美稻津</p>

<p>100</p> <p>七言。吉野之作。一首丹堀広成 高嶺嵯峨多奇勢。長河渺漫作廻流。 鐘池超潭異凡類。美稻逢仙同洛洲。</p>	<p>102</p> <p>五言。從駕吉野宮。一首高向諸足從駕。 在昔釣魚土。方今留鳳公。 彈琴與仙戲。投江將神通。 柘歌泛寒渚。霞景飄秋風。 誰謂姑射嶺。駐蹕望仙宮。</p>	<p>119</p> <p>五言。奉和藤太政佳野之作。一首 葛井広成 物外蠶塵遠。山中幽隱親。 笛浦樓丹鳳。琴淵躍錦鱗。 月後楓聲落。風前松響陳。 開仁對山路。獵智賞河津。</p>
<p>Ⅲ吉野<sup>1</sup> Ⅰ高嶺嵯峨<sup>2</sup>・Ⅰ多奇勢<sup>2</sup>・ Ⅰ長河渺漫<sup>2</sup>・Ⅰ作廻流<sup>2</sup></p>	<p>Ⅱ霞景飄秋風<sup>3</sup></p>	<p>Ⅰ物外蠶塵遠<sup>2</sup>・Ⅰ山中幽隱<sup>2</sup> Ⅲ笛浦<sup>1</sup>・Ⅲ琴淵<sup>1</sup>・Ⅱ躍錦鱗<sup>2</sup> Ⅱ月後楓聲落<sup>2</sup>・Ⅱ風前松響陳<sup>2</sup> Ⅰ山路<sup>2</sup>・Ⅰ河津<sup>2</sup></p>
<p>吉野之作</p>	<p>吉野宮（宮浦辺り の離宮） 方今留鳳公 駐蹕望仙宮</p>	<p>藤太政佳野之作 獵智</p>
<p>A C 吉野之作 A C 高嶺嵯峨多奇勢・A C 長河渺漫作廻流 C 鐘池超潭異凡類・C 美稻逢仙同洛洲</p>	<p>A C 從駕吉野宮 C 在昔釣魚土・C 方今留鳳公・ C 彈琴與仙戲・C 投江將神通 C 柘歌泛寒渚・C 霞景飄秋風 B C 誰謂姑射嶺・C 駐蹕望仙宮</p>	<p>A C 佳野 B 物外蠶塵遠・B 山中幽隱親 B E 笛浦樓丹鳳・B 琴淵躍錦鱗 月後楓聲落・風前松響陳 A 開仁對山路・A 獵智賞河津</p>